

アトリエ 琉游舎 だより 219号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2025年12月 3 日日発行

風花の今日をかなしと 思ひけり

高浜虚子

○風花の舞う季節になりました。高原山から下りてくる雪雲が降らせる風花は積もることはありませんが、晴れていても風花が舞うときは冬の寒さを一層感じます。風花は冬型の気圧配置が強まり、大陸から日本列島に寒気が押し寄せてきて日本海側で雪が降るときに、その雪雲の一部が日本列島の中央にある山脈を越え、太平洋側に流れ込んできて起きる現象です。

○関東平野最北端のこの地の気候は太平洋側となるので、雪が積もるときは南岸低気圧が発達して、北から寒気が流れ込んでくるときだけになります。那須の山や日光の山が盾となって、ここまでは積もる雪雲が下りてこられないのです。盾の向こう側の会津や群馬の山は11月から雪で真っ白ですが、まだこちら側は降ったと思ったらすぐ溶けてしまう雪です。

○12月に入ると盾の南側の山々も雪が3月まで消えずに残ります。晴天なのに寒く、遠い雪景色の山から風花が舞い降りる光景を虚子は「今日はかなし」と詠みました。積もることなく空中を舞うだけで消えてしまう雪の儚さを「哀しみ」と重ね合わせた句なのです。儚く消える雪の姿を「花」に喩え、花の命より遥かに短い雪の命を「風花」と表現した日本語の美しさ、それを自身の哀しみに重ね合わせて句に表現する美しい日本人の姿がここにあります。

○青空が広がっているのに空から舞い降りてくるものには雪だけでなく雨もあります。雪に限らず雨のことも合わせて「天泣（てんきゅう）」と呼ぶことを初めて知りました。風花も天泣のカテゴリーの一つとなるのでしょうか。天はなにゆえに泣いているのでしょうか。

○一見天に広がる青空は、何の憂いも無い、心穏やかな心持ちだと思われるのですが、それでも天からみる地上の姿は、天が涙をこぼさなければならないほどのことが起こっているということに違いありません。天泣を受けて、私たちの身の回りにその原因がないかを改めて顧みる必要があるかもしれないと感じる、昨今のわたしたち日本人のありようです。

新年祝祷会 1月1日（木）10時半 琉游舎にて

12月・1月スケジュール			木	金	土	日
			4	5	6	7
火 水						写経会 13時半から
8	9 読書会 13時半から	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23 読書会 13時半から	24	25	26	27	28
28	29	30	1月1日 新年祝祷会 10時半	2	3	4

読書会

12月9日（日）
12月23日（日）
13時半から

写経会

12月7日（日）
13時半から

風が吹き抜けるたびに、頭上から茶や赤や黄色の枯れ葉がシャワーのように降り注いでいます。目の前に色とりどりの枯れ葉のカーテンが降ろされたかのようです。年にわずかだけ、紅葉の終わりに見られる光景です。落葉の跡は、葉っぱを落とした大木の先に広がる初冬の青空と道一杯に敷き詰められた枯れ葉の絨毯。私はこの絨毯を歩くときの音に心を強く引かれます。大きく膝を挙げ、上から強く踏みしめてるときのさくさくの音や、靴を葉の下に潜らして滑るように歩く感触とかさかさの音の、落ち葉との戯れを楽しみます。

道を埋め尽くした枯れ葉はいつの間にか吹きだまりとなって一か所に追いやられ、そのまま朽ち果てていきます。土の上ならばいずれ土に還っていきますが、道の際や屋根樋にたまった枯れ葉は、片付けられない限りいずれそこから雑草が生えてきたり、ミミズの住処となって猪に掘り起こされることになります。かつて山の落ち葉は腐葉土として貴重な肥料になったものですが、今では落ち葉を集めている人は殆ど見かけなくなりました。山の雑木もかつては薪となる貴重な資源だったので、山に人が入り、定期的に整備していたと言うことですが、今では薪のためや堆肥のために山に入る人もいないので、里山は荒れ果て、人の住処と獣の住処が隣接するようになってしまったようです。人と獣の間に緩衝地帯がなくなってしまったと言うことです。

人と自然との共棲は言うは易しです。が、人を襲う熊や農作物を荒らす猪は人間の生活範囲に出てもらっては困るので、駆除してくれと言うのが、そこに住む人の偽らざる心境です。生物の保護と人の生活はその境界線上に住む人間にとってはジレンマの対象でしかありません。人間界でも互いに利害の反する集団間の境界は常に諍いの種です。話し合いで解決できればよいのですが、脅しや、暴力、戦争の結果のどちらかの屈服まで行かないと解決できないことは、現実が証明しています。しかしそれは一時的な解決で、火種が残り続け、それが何時発火するかも知れないことは、歴史を顧みれば明らかなことです。それほど境界を挟んで互いが平穏に生活し続けることは困難なことです。人権、自由、平等と言う言葉を隠れ蓑にしたとしても、結局は集団間のパワーバランス（経済力と武力）が境界の帰趨を決めることになることは言うまでもありません。

生物界の頂点に立つ人類は自然界で圧倒的な経済力と武力を持っているので、人の生存を脅かす他者に対しては、そのパワーを遺憾なく発揮してきました。そして生き物（他者）を絶滅に追いやり自然を破壊してきた過去からの推移と足並みをそろえるようにして、人類は技術の進歩や生活の豊かさを獲得してきたのでしょう。しかしそれが行き着くところは、地球の破壊であることに人類は気づいてしまったのです。人類を幸福にするはずだった他者への支配が、結局はブーメランのように人類への災厄となりました。たかが自分の足を食べてしまったのです。その根本原因はなにか、それは自然は支配できるという思い上がった考えを人類が神の意志だと考えたことです。主観対客観、善対悪、人類対自然などの二元論を論理の根底に置き、それが理性の働きによって証明される絶対的な真理と考えたことにあるのです。この絶対神信仰から作られた論理は破綻しているのではないかとこの疑問は、19世紀後半辺りから哲学的思考の大きな潮流となっていくのですが、未だにその答えは見つかっていません。つまり人類は人対他者（自然）のジレンマ、「こちらを立てればあちらが立たず、そうであれば、あちらに消えてもらおうか、しかしそうしなければいずれこちらにも災厄が及んでしまう」という他者との二項対立のジレンマを理性（神の意志）で解決できていないからです。

諸行無常、一切皆空の世界に生きる私たち仏教徒から見ると、彼らのジレンマは永遠に解決できないと思われれます。なぜならば彼らの原理は二元論にあること、そしてその二元論の根本には神の意志があることです。この西洋の論理が日本に輸入されてから150年以上経ち、その間日本人は何とかその西洋論理を身体化しようと努力してきましたが、やはりそれまで身体に受け継がれてきた八百万のカミと諸行無常の心身は、おいそれと絶対神に取って代わることはできなかったのでしょうか。個人対神の向き合い方は日本人にはできないと言うことです。そしてそこから自ずと引き出される、個性の重視、個の権利、個人主義の徹底による社会の構築と言う西洋社会制度は形式的模倣に終始し、日本人には血肉化されることはなかったと言うことが、今、この時代の日本なのだと私は考えます。日本社会に現在起きている様々な対立や分断はカタチだけの西洋社会制度の中で生きる私たち日本人が、西洋社会制度と古来以来血肉化されてきた八百万のカミと諸行無常の心身との間で激しいジレンマを起こしていることに原因があるのではないかと考えるのです。

神の意志に生きる西洋社会の原理は「個」、つまり個人主義にあるとしたら、八百万のカミと諸行無常が習合（神仏習合）した日本人の原理は何かと言うことを考える必要があります。それを「個」に対して「相互」という言葉で表されるのではないかと考えます。個人主義に対して関係主義、「個」に対して「集団」と言うことです。なぜなら八百万のカミの原理は、すべての存在にカミは宿るということ、森羅万象全てはカミ、そして私自身もカミであるということ。それは相互にカミとして尊重畏怖し、感謝し、慈悲を施し合うと言うことです。そして諸行無常はすべての存在は固定的なものではなく常に変化し、互いは相互依存的な現象に過ぎないという考えです。一切皆空、すべてはありのままにあると言うことです。善も悪も、正も誤も、真実も偽りも、それは「個」が理性という名の固定的視点で見ると起こる結果に過ぎないのです。もし私たち日本人が二項対立のジレンマに晒されているのであれば、何らかの境界線上に立たされているのが日本の現在と考えるべきなのです。それが分れば、神仏習合が血肉化されているはずの日本人には、本来二項対立によるジレンマは起こりえないはずで、人と獣の境界線では、「個」の視点だけでは八百万のカミの中で生きることはできないと、落葉を踏みしめるさくさくの音が私に語りかけたことです。